人間の行う非言語伝達行動について

水　沼　和　夫*

Zu menschlichen nichtsprachlichen Kommunikativen Handeln

Kazuo MIZUNUMA*

Abstract

Diese Referat betrachtet das nichtsprachliche kommnikative Handeln des Menschen in Hinblick auf Humanethologie. Zunächst werden die Übersicht der Entstehungsgeschichte von den menschlichen Sprachen versuchsweise vorgelegt, die die Ursprunglichkeit der nichtsprachlichen Kommunikationsmittel erkennen lassen. Anschließend werden die Eigenschaften vom nichtsprachlichen Handeln dargelegt, dabei wird es bemerkt, ob das angeboren oder erworben ist. Zum Schluß werden zwei kulturwissenschaftlichen Äußerungen von Irenäus Eibl-Eibesfeldt als Ermahnung für die Großstadtmenschen zusammenfassend behandelt.

Key words: nichtsprachliches Handeln, Humanethologie, angeboren oder erworben

1. 非言語的行動

『非言語コミュニケーションの基礎理論』の冒頭で，パターソンは「歴史をみてみると，作家，詩人，画家，そして彫刻家たちは皆共通に，非言語行動を巧みに描写して，登場人物，その人たちの動機あるいは，関係性の性質に関する洞察を彼らの愛好家たちに示してきた。このように非言語行動を描写し分析することは，長い間芸術家の関心事であったが，非言語行動に関するまともな科学的研究は，ごく最近になってようやく始まったばかりなのである」[1] と言っている。

つまり，1970 年代になって本格的な研究が始められるまで，人間の行う非言語的情報発信行為は，科学的観察の対象とされることはなかったのである。パターソンの指摘の通り，芸術家たちは確かにそれについての知識を大いに活用してはきたが，彼らの創作活動の主要テーマとしたわけではない。作家や詩人は当然ながら言語表現の技能を磨き上げようとしたのだし，画家や彫刻家の場合は，その創作行為そのものが独自に鍛錬された非言語的発信行為なのであって，「対象として取り扱う」こととは明らかに区別される。つまり，人類は自らの特徴的なさまざまにパターン化された非言語行動に対し，大きな関心を払うことなく 1970 年代に至った，と考えて良いようだ。

これら芸術に関連して興味深いのは，ホーフマンスタールの＜チャンドス卿の危機＞やリルケの＜事物詩＞に象徴されるような，表現手段としての「言語」の不完全性についての予感である。彼らの芸術的努力は，結果として言語表現の地平をさらに押し広げることにつながった。しかし，伝達手段としての言語への漠然とした不満は，人類の歴史における言語の歴史の短さを思う時，一面において，無理からぬことと判断されうるのである。猿人に始まる人類の歴史を約 500 万年とすると，言語の歴史はその百分の一の精々4〜5 万年に過ぎない。さらに文字の歴史ともなると，最古とされるメソポタミアのシュメール文字でも，5200 年余りと考えら

平成 15 年 12 月 19 日受理

* 総合教育センター・教授

れている。これに対し，装飾の最古のものは旧石器時代に遡るという。従って，現代芸術において表現の問題により強く突き当たったのが，画家や彫刻家ではなく詩人たちだった，というのも偶然ではなかったのだと言える。

このことは携帯電話を手にした今日の若者たちが，仲間内のメールのやり取りで多用する「絵文字」や「顔文字」の起源と機能を考える上でも有効である。音声を伴わないメールでのコミュニケーションでは，電話に比べて感情の機微は格段に伝わりにくい。そこで顔文字が広まった。顔文字自体はインターネット時代以前から一部で用いられていたものだが，ワープロやパソコン通信が一部の知的エリート層のものだった当時においてはむしろ余分なものであり，今日のような支持が集まることはなかった。それが携帯メールやインターネットの＜チャット＞欄などでは至極当たり前のものと見做されるに至っている。こうした変化は，携帯電話の急速な普及によると考えてよいだろう。

その氾濫振りには批判もないわけではないが，携帯メールのコミュニケーターたちが，言語そのものによる伝達に不足を感じているのは必ずしも彼らの言語能力に欠陥があるためばかりとは言えない。文字言語それ自体のコミュニケーション手段としての限界にも原因はある，と見ることもできる。それを補うべく，等幅フォントの各種記号を組み合わせた顔文字が，多数の若者たちによって受け容れられているのだ。それは音声による対話や対面コミュニケーションでは必要とされないものである。

2. 人類史における言語の成立期

人間の非言語表現を扱うにあたって，便宜的にであれ人類史上における言語の成立期を，ある範囲で設定しておくことは有益であると思われる。

遺伝子的に見て，人類がチンパンジー，ボノボらから枝分かれしたのが600万年から500万年前だといわれている。その猿人たちがジャングルからサバンナに出て直立二足方向を始めるのが400万年前である。これらについてはほぼ確定しつつあると考えて良いようだ。しかし，その後のホモ・ハビリス（猿人に数えられる）を経た385万年後，現代人の祖先クロマニヨン人らの登場までについては諸説あり，確定しにくい。ホモ•ハビリス，さらにはホモ•エレクトゥス（原人）など旧石器時代を生きたヒトは，数百万年に及んでなんら見るべ変化もない素朴な道具を用い続けたらしい。と言っても，この間には，二足歩行がより確実なものになったし，右手での道具の使用と連動した脳の分化，脳容量自体の増大など，身体機能面での変化は認められる。ネアンデルタール人（旧人）はそのもっとも進化した例と思われるが，これは，新石器時代に差し掛かったところで，およそ3万年前に絶滅した，と考えられている。彼らは現代人に勝るほどの量の脳を持つに至っていたが，喉や声帯の形態などからそれほど多彩なな発音は出来なかったと思われる。したがって，彼らがそれほど高度な音声言語を発達させえたとは考えられない。また，そのことが，15万年ほど前に登場していた新勢力であるクロマニヨン人などの新人との競争に敗れる原因だったのではないか，という推定の原因となっている。

現代人の直接の祖先とされるホモ・サピエンス・サピエンスは，10万年以上にわたって旧人と同様の生活をし，3万年ほど前になってようやく爆発的進歩と言える新石器時代を招来する。それと同時に，ネアンデルタール人は姿を消してしまう。ネアンデルタール人とこの新勢力との間のミトコンドリアDNAの差異は，両者が別種であることを示しており，混血があった可能性は完全には否定出来ないにしても，現段階としては前者が淘汰されたとする見解が優勢である[2]。

ヒトの言語は「ホモ・ハビリス以降，段階的に発展してきた」とする「言語獲得の持続性モデル」[3]の見解は，新人の身体特性が現代人とほ

とんど同じであり彼らによってはじて言語は成立したとする説を排除するものではない。同時に，後者も，ネアンデルタール人が用いていたであろう「音声言語」は，チンパンジーのそれとは比較し得ない高度なものであったはずだ，とする説の正当性を覆すことは出来ないだろう。しかし，ネアンデルタール人の音声言語は，可なり発達したものであったにしても，身体の機能や形態の制限で，現代人のそれとは，やはり別種のものであったことは確かだ。したがって，およそ3万年前，複雑な発音を操ることの出来る新人によってヒトの言葉は急速な発展を示したのだろう，という推定が成り立つ。

それは，猿人の類がサバンナに出て直立二足歩行を始めてから397万年後，新人の登場から数えても12万年後のことである。

これは新石器文化の始まりとも重なり合っている。以下に引用するアイベスフェルトの見解は，その重なり合いに注目したものである。

「もちろん，すでに述べた道具文化の発達も決定的な衝撃であった。しかしわれわれの祖先の道具文化が何十万年もの間，少数の，たとえば握り斧のような，かなり単純で変化しなかった同じ道具に支配されていたことは注目される。約5〜4万年前にはじめて，道具文化は豊かな展開をみせた。おそらくこれは，知識を伝承することを可能にした言語の発達に依存している」[4]

そして，道具文化と言語形成のこのような劇的な展開が，相関関係にあると同時に社会形態の変化とも深く関わっていたこともまた事実と思われる。新人の言語的優位は同種の集団間にネットワークを築くと同時に，早くも派生した「方言」が，「集団と集団の間に境界を引き，それによって繁殖共同体を作り出し，それぞれの共同体は独自の道を行く」[5]こととなる。最後のおよそ1万年間をクロマニヨン人と競合しつつ生きたネアンデルタール人が，新石器時代に相当する文明的進歩（シャテルペロン文化）を果たしながら人類史の大きな曲がり角で，遂に退かなければならなかった原因は，より複雑な社会構造に対応するための高度な言語能力に欠けるところがあったためではないか，と推測される所以である。

3. 非言語表現行動の特性

人類の言語成立を上のように想定する時，我々のコミュニケーション行動において言語以外の要素が非常に大きな機能を担う，ということは決して驚くにはあたらない。チョムスキーの言うように，われわれの言語獲得能力が生得的なものだとすれば，われわれの遺伝子にそのプログラムが書き込まれたのは，ホモ・サピエンス以後と考えられる。「はじめに言葉ありき」の前段階として，われわれの遠い祖先は非言語よる発信受信を行うほかはなかったのである。その期間の長さは全人類史の99%以上にも及ぶ。

非言語表現行為に対する今日の科学的関心の高まりを準備した業績としては，エドワード・ホールの比較文化的研究があげられる。それは第一に，異文化理解を進めるためのものだったが，同時に当初から生物学的な視点を備えたものでもあった。

「いかにある文化が他の文化と異なるか，どうしたらこの差異を一般的な言葉で伝達できるか，というこの問題を追及する際に，私は，まず，特定の文化を説明するのに使うことの出来る単一の基準はない，ということを確信したが，この点で，文化を単一の範疇と見なす多くの人類学者と私は意見をことにすることとなった。文化産出の動物として人間が活動する現在と，人間も文化も存在しなかった過去との間に断絶はない，という認識によって，私は，この結論に導かれたのであった。太古と現在との間には切れ目のない連続がある。というのは，文化はbio-basic（つまり生物学的活動に根ざしている）であるからである。このように文化に先行するが，後の人間

によってわれわれが今日知っているような文化に精巧に仕立て上げられた行動を，前文化と名づけることができよう。前文化的活動の一例として，＜領域性＞を上げることができる。それは，サカナからライオンさらには現代人に至るまでが，領域を主張し，防衛する仕方にかかわる」

この関連でホールが示した10項目にわたる「第一次情報体系」は興味深いものだ。

1. 相互作用
2. 連携
3. 生計
4. 両性性
5. 領域性
6. 時間性
7. 学習
8. 遊び
9. 防衛
10. 開発（物質の使用）[6]

最初の「相互作用」は広義での「コミュニケーション活動」に置き換えうるもので，これだけが言語的関与を含むが，他はすべて非言語的なものである。「連携」は人間関係における役割の形式化（言語としては「敬語」など）に，「生計」は職種に関する評価の文化差に，具現される。以下，「両性性」は男性的と女性的の区分の，「領域性」は縄張り，あるいは近接学の，「時間性」はまさしく時間の用い方の文化差を指している。「学習」，「遊び」はそのまま学習と遊びの方法の文化差を扱い，「防衛」は固体の防衛行動，病気や他宗教への防衛行動，さらに戦時の捕虜を想定した防衛姿勢にまで及ぶ。最後の「開発」は道具を介した人間の諸活動（労働の貨幣への置き換え，貯蓄なども含む）を指している。ホールは，これら個々の活動は相互に関連し合いながら特定の文化体系を構成し，「その起源は文化も人間も存在しなかった過去に埋もれている活動の複雑な連続」で，そのほとんどは「無意識に」なされてきた，と考えている。それと同じだけ「無意識に」異文化を誤解する傾向を，事実われわれは有している。「文化はその成員を盲目化する」[7]のである。

一例を挙げれば，われわれ日本人が「お金」の意味でする，親指と人差し指の円は，デズモンド・モリスによれば日本以外では一国として「お金」を意味する国はない。北米およびヨーロッパでは「オーケー」「すばらしい」「パーフェクト」の意味だが，同じヨーロッパでもフランス人，ベルギー人が不機嫌にこのジェスチャーをすると「ゼロ」を意味する。（ただし，最近は「オーケー」の意味でこの仕草をする場合も増加しているという。特に，にこやかな表情が伴う場合には「オーケー」だと判断される）しかし，注意が必要なのは中東，ギリシャ，トルコではこのジェスチャーは性的侮辱を意味する，という点である。特に手のひらを上に向けての円印（日本ではこれが「オーケー」と混同されない「お金」のジェスチャーなのだが）は上記に加えてロシア，ドイツなどでも性的侮辱，同性愛を意味する，という[8]。同じ仕草や行動が，文化的背景や脈絡によって異なる意味を持つのは非言語情報の特徴である。異文化間コミュニケーションにおいては，こうした文化差の理解は外国語の習得と並んで重要な意味を持つ。

非言語表現行動の表現手段としての重要性を再認識させることになったメーラビアンの公式は以下のようなものだ。

$$A_{\mathrm{Total}}=0.07\,A_{\mathrm{Content}}+0.38_{\mathrm{Tone}}+0.55\,A_{\mathrm{Face}}$$ [9]

つまり，伝達の成否を決定する要因のうち，メッセージの言語的内容自体は全体の7%にしかあたらず，残りの93%はすべて非言語的なものだという考え方だ。声の良し悪し，強さや抑揚などが38%，顔つきや表情の豊かさ，視線の好ましさなどが55%を占める。実際には，これら3項目を「−3」から「+3」の範囲で個別に評価し，「トータル」がプラスかマイナスか，などを判断基準にする[10]。

この公式については，例えば次のような反論も可能だ。つまり，後に有名になった1863年11

月ゲティスバークにおけるリンカーン演説は，それを聞いたほとんどの新聞記者たちにとって，直前に行われたある長老議員の荘重な演説の名調子に比較してまったく取るに足らないものだった，と伝えられているが，「ゲティスバーク演説」は歴史的演説として残ったのだから，やはり言語メッセージの内容が最重要である，と。しかし，当然のことながら，メーラビアンの公式は，そのことを否定してはない。言語メッセージが同一である場合を想定すれば，この公式の正当性は諒解されるであろう。

ただし，非言語表現が伝達効果上非常に大きな意味を持ちうるにしても，それが十分な効果を発揮するためには，動作・仕草・表情と言語メッセージとの調和，場の状況との調和，受け手の性別や年齢の配慮，受け手の反応を受けてのフィードバックなど，多くの条件が整っている必要がある。でなければ，結果としてマイナス効果だけが残る，ということもありうる。これらについての研究はまだ途上と言える。

4. 獲得的と生得的

人間の行う非言語表現は，成長過程で「学習」することによって身に付く「獲得的」なものと，我々の遺伝子にいわばプログラムとして書き込まれている固定的行動パターンの発現である「生得的」なものに大別される。後者については，アイベスフェルトの研究に詳しい。後にも触れるが，ここでは新生児のモロー反射についての項を引用する。

「乳児は，急に支えをなくすと，支えを探そうと腕を広く横に広げ，続いて体の真ん中で再び腕を合わせて物につかまろうとする。この反射的な把握もどちらかといえば痕跡である。その証拠に，早産児においてその把握が最もはっきり現れる。胎齢7ヵ月児は，両手で綱にしがみついて自由にぶる下がっていることさえできる。正常に生まれた新生児にはもはやそんなことは出来ない。これは漸進的な退化のプロセスを物語っている」[11)]

自らの身を守るための生得的と思われる＜しがみつく力＞は，胎内では発達したものであったのに，誕生のころには退化を始めている，という。類人猿の子は「親にしがみつく子(Elternhocker)」に分類されるのに対し，人間の子は親の手の支えがある「抱っこっ子（Tragling)」であるため，前者のような強い力は必要としない。したがって，しがみつく強い力は類人猿の「痕跡」であり，胎内で一度は類人猿と同様に発達しかけ，やがて消えてゆく，と考えられるのである。

一方，非言語表現行動の大多数をなす獲得的なものは，どのように分類されうるのか。これについては，モリスの『マンウォッチング』を参照する。この場合の分類基準は，それがどのように獲得されるのか，に置かれている。

1) 発見動作
2) 同化動作
3) 訓練された動作
4) 混合動作

「発見動作」の典型として挙げられるのは腕組みのポーズである。それは，われわれが成長過程のどこかで無意識に身に付ける動作であり，特に，習う必要もなく獲得する動作だ。身体の形や機能に規定されている。

「同化動作」は仲間内で自然に見につくもので，特に地位の高い者，尊敬している者の仕草を無意識のうちに模倣するわれわれの傾向に関係している。男性同性愛者の特徴的な一連の動作もこの代表的なものである。

「訓練された動作」とは，教授されたり意識的に学習することによって身につくもので，とんぼ返りのような難しいものから，口笛やウィンクのような易しいものまでが含まれる。

「混合動作」は＜ビクトリア時代の淑女の忍び泣き＞のように，生得的な「泣き」がマナー面からの教示や理想形の模倣（訓練，同化）など他の影響を受けている場合を想定している。

こうして獲得された人間の動作の起源を，エ

ドワード・ホールは「人間も文化も存在しなかった過去」にある，と考えた。つまり，人間が学習によって身に付ける獲得的な動作パターンにも，その一つ一つに悠久の歴史が存在する，という見解である。「シチリアのノー」と呼ばれる仕草にも，その一端が窺える。指の背中で顎の下を前方に払い上げる（「顎払い」）この仕草は，デズモンド・モリスによれば，北イタリアでも行われるが，その場合は侮蔑を含む「うせろ」の意味であり，南イタリアでは「いいえ」「何もない」「何もいらない」の意味で行われる。さらに「首もたげ」で頭を後ろにそらせる動作を伴って強調されることもある。＜ギリシャ人の否定＞とも呼ばれるこの仕草の境界線はナポリ北部の山脈で，ギリシャ時代に殖民地支配が行われたラインにほぼ一致する。そして，およそ2,000年後の現代において，ギリシャ人も南イタリア人も同様の意味でこの仕草を用い続けているのである[12]。古代ギリシャ人の遺産が現代にまで生き続けている事例として注目される。

5. 非言語表現行動の偽装と「漏洩」

人間の生得的な非言語表現としては喜怒哀楽の表情を，日常的に観察される数少ない典型としてあげることが出来る。異なる文化間においても，喜怒哀楽の表情が誤解されることは無いといって良く，かつ，われわれ人間は誰に教えてもらわなくてもその感情を表情に表す。これが生得的行動の特徴である。ところが，顔の表情は人間が行う生得的表現行為のなかでは最も恣意的にコントロールされやすいものでもある。一定の状況下において内心の想いとは裏腹の表情を見せることは，今日の人々にとっては当然でさえある。必要とあれば顔の表情は比較的容易に制御されうる。しかし，二重束縛（Doublebind）と呼ばれるこのような「嘘」は，倫理的理由以上に病理学的理由から避けることが望ましいのは言うまでもない。

しかしながら，言語表現に比較して，非言語表現が偽装し難い性質の表現行動であることは良く知られている通りである。それは，生得的か否かには無関係に，われわれが多くの場合，無意識のうちにこれらの非言語行動を行っているからである。場合によっては覆い隠したはずの「本心」が，些細な非言語行動によって暴露される，ということが生じる。これは「非言語漏洩」と呼ばれる。最も偽装しにくいのは手足の何気ない動きであり，例えば指先で鼻ををこする些細な仕草が，言語メッセージと裏腹の内容を暗に漏らしたりするのである。非言語表現行動のこの側面に着目した心理学的アプローチも盛んに行われている。

6. 系統発生的適応行動

アイベスフェルトは生得的行動パターンについて論じる中で，リスの食物隠し行動を取り上げている。

「中部ヨーロッパのリスは，秋にクルミやドングリ，そしてその他の木の実を冬季の食糧として隠すことが知られている。リスはクルミをもぎ取り，それから地上に滑り降り，木の穴とか絶壁のあいだとかあるいは他の目印となるものが見つかるまで探し回る。そして見つかると前足でそこを引っかき，穴を掘り，クルミをそこに入れ，鼻先を素早く動かしてつっつき，再び掘り出した土をくるみの上にかぶせ，最後にしっかりと押し付ける。このリスは「留巣性」として，目は見えず，体毛も生えないで生まれてくる。この生まれたての子リスはこの動作を行うことは出来ない。このリスを社会的に隔離して，さらにみずからの訓練によって行動を学習するという可能性も与えずに飼育することが出来る。もしわれわれがこのリスを格子の箱の中で，敷藁なしで流動食を与えて飼育すると，リスは掘ることは出来ないし，硬いものを扱うことも出来ない。それにもかかわらずこの種のリスは，それが成長すると，食糧を隠す技術をマスターするようになる。われわれがクルミを与

えると，まずはじめはいっきに平らげる。満腹した後は，さらに与えられたクルミを簡単には捨てないだろう。むしろ口にクルミを入れて実験空間内を探し始める。そのときそれは垂直な障害物に特別な関心を示す。椅子の脚とか部屋の隅とかで掘る行動をはじめる。少しばかり掘る動作をしたあと，クルミを置き，鼻先の動きでつき固め，固い床には全然あなをあけることなどできなかったにもかかわらず，この小動物は空中で前足を使い，穴を固める動作と，つき固める動作とを行うのである」[13]

この食糧隠しの行動を，学習されたものと考えることはできない。それは人間の場合の「喜怒哀楽の表現」や「モロー反射」のような，生まれると同時に行使されうる種類のものとは区別され，系統発生的適応行動と呼ばれる。遺伝的にプログラムされた固定的行動パターンであることには変わりがない。

また，生得的なものであれば，それらすべては類人猿の，すなわち動物的な「痕跡」であるとする判断は誤りである。これはアイベスフェルトが特に強調する点である。「喜怒哀楽」はチンパンジーなどにおいて十分に明確ではないにせよ表現されている，と考えて良いかもしれない。が，そのうちの「泣く」行為は他の霊長類では見られない，ホモ・サピエンス独自のものである。従って，我々人間の生得的行動は，常に我々の動物としての痕跡であるわけではないのだ。それは適応の結果なのである。言語獲得能力もまた，生得的な，しかもわれわれ人間にのみ生得的な能力なのである。

7. 現代人の問題

アフリカのブッシュマンやヒンバ族，南米のヤノマミ族など数多くの文化を調査したアイベスフェルトは，無名化した都市空間のなかで生活する現代人に向けて一時に政治的な関心を呼び覚ましつつーさまざまな提言を行っている。

「巨大社会においては，人間関係をよりパーソナルに形成することに成功しないと，不信と不安が共同体における共同生活を規定する決定要因になってしまう恐れがある。すなわち人間は，不安なときには，＜強い＞人，あるいはまた安全を提供してくれるようなイデオロギーに与する傾向がある。不安を持つ人間は，確固たるもののように見えるスローガンやデマに弱くなり，扇動者に服従する」[14] その背景には「人間の他の人間に対する物怖じは，普遍的なもののひとつであり，われわれの社会的共同生活に決定的に影響している。その結果われわれは見知らぬ人に対し閉鎖的になりがちとなる」[15] という一般的傾向があるが，この傾向は優位願望やなわばり意識などとともに我われを戦争へと誘引する可能性のある傾向である。さらに，不安や絶望に捉えられた者の，権力者や虐待者により強く結びつこうとする傾向が作用することによって，あるいは同情を引く子供っぽい行動への回帰が生じることによって，独裁制を成立させるメカニズムが出来上がる。「独裁制では，不安に基づくこの結びつきが利用される」のである。したがって，われわれは自らの＜よそ者嫌い＞の傾向に注意し，それが攻撃的なものに発展しないように努力すると同時に，その反面の傾向である「親愛行動」を発展させる環境造りに努力する必要がある。また，不当な抑圧や暴力の下に忍従しない決意も必要だ。それもわれわれの危険な生得的傾向であるからだ。

「親から虐待された子供は，ふつうその親に非常に強い結びつきを持つ。そうした子供は驚くべきことに，保護のために親の家から施設へ運ぶ救済措置に抗議する」[16]

これは，社会思想的と言うよりもエソロジストとしてのアイベスフェルトによる警告である。次に示す女性の社会的役割に関する議論も同様で，＜保守的＞という予想される批判に抗いながら，敢えて行われた意見表明だと言えよう。まず，「いかなる課題を男と女がは果たしているかを，諸文化を比較しながら研究するなら，はっきりした差異を確認できるであろう」[17]と

して，男の役割としての狩猟，なわばり防衛，女の役割としての育児と家政，共同作業としての野良仕事，役割評価の形など自然民の伝統的な役割分担を概観した後で，「広く流布している性役割行動の諸規範が，文化的もしくは生物学的根拠をもつものではあっても，われわれの今日の社会においてはもはや＜適応＞とは認められない，ということはまったくありうることである」とする。そして，アイベスフェルトはここから次のように議論を展開する。

「近代の女性運動がこれらの規範のいくつか，例えば男の優位という規範を疑問視しているのは当然のことだと，私には思えるのであるが，しかし他の諸領域ではたぶん理性的検討をやりすぎているのである。これとの関連において次の問いが立てられなければならない。それは，生活が社会的あるいは非社会的な領域においてわれわれに課す要求のうちどれに対して，男もしくは女が特別の素質を持って生まれているか，という問いである」と。しかし，もちろん「それは，われわれがこうした生物学的素質に対していかなる場合にも必然的に譲歩しなければならないからではなく，いくつかの部分領域においてこうした素質のことを考えに入れておくことは，時として理性的であり，またわれわれの人道的理想とも一致していることがありうるからである」[18] と付け加えている。続けて，生育過程における男女差について詳しく見た後で，さらにイスラエルの実験村落キブツの実例を引く。その創成期において，この実験共同体では型通りの男女の平等が目指されたのだった。

「平等に達するために，女たちは女らしさを押さえつけなければならない，と信じていた。女たちは化粧をせず，緩やかなズボンをはいて，トラクターに乗った。そして，男たちとの身体的な仕事率の違いを，超過勤務によって埋め合わせしようと努力した」[19]

それが今日では，開拓期を経験した女性たちの68%，キブツ育ちの世代の女性の88%が「結婚パートナーおよび母親としての自分の役割のほうを，労働者としての役割よりも重要だ」[20] と判断しているという。当初原則とされた子供の共有化・共同育児も，子供たちと女性たち自身の意向に沿う形で徐々に改められ家庭に戻されてしまった。アイベスフェルトはこの事例を称して「イデオロギーに対する生物学の勝利」と言っている。キブツの試みは「生物学的に決定された両性の異なった傾向性のために失敗に終わった」[20] のである。

「平等を求める努力は，むしろ典型的に女性的な活動をも等しく査定を求める努力であるべきだ」というのが，この点に関しての彼の見解である。職業活動が，育児以上に知的で創造的であるわけではない，と思われるからである。

おわりに

以上，人間の非言語表現行動について，言語成立史および人間行動学の関連から考察した。今後の研究のための基礎作業の一環であり，結論を導くことを目的とはしていない。

主な参考文献

『ヒューマン・エソロジー　人間行動の生物学』I. アイブル・アイベスフェルト著，日高敏隆監察，桃木暁子ほか訳，ミネルヴァ書房，2001年

註解

1) 『非言語コミュニケーションの基礎理論』M.L. パターソン著，工藤力監訳，誠信書房，2001年，s. 1.
2) http://plaza.harmonix.ne.jp/~onizuka/History.html
3) 『コミュニケーション学への招待』橋本良明編著，大修館書店，1998，s. 6
4) 『ヒューマン・エソロジー』s. 612.
5) a.a.O., s. 17
6) 『沈黙の言葉』エドワード・ホール著，南雲堂，1　國広正雄，長井善見，斉藤美津子訳，1969，s. 60f.
7) a.a.O., s. 72.
8) 『ボディートーク』デズモンド・モリス著，東山安子訳，三省堂，2000，s. 122f.

9) 『コミュニケーション学入門』植村勝彦，松本青也，藤井正志著，ナカニシヤ出版，2000，s. 72.
10) a.a.O., s. 73.
11) 『ヒューマン・エソロジー』s. 638.
12) 『マンウォッチング』（上，下）デズモンド・モリス著，藤田純訳，小学館，1999，s. 104f.
13) 『プログラムされた人間―攻撃と親愛の行動学―』I. アイブル・アイベスフェルト著，霜山徳爾ほか訳，平凡社，1977, s. 24f.
14) 『ヒューマン・エソロジー』s. 119f.
15) a.a.O., s. 197.
16) a.a.O., s. 85.
17) a.a.O., s. 305.
18) a.a.O., s. 306.
19) a.a.O., s. 322.
20) a.a.O., s. 324.
21) a.a.O., s. 330.